妻木晩田遺跡について

２０１８・７　　内　田　正　英

１　はじめに

妻木晩田遺跡は、今からおよそ２０００年前、弥生時代中期後葉から同終末期にかけて約３００年の間、人びとが集住していたムラの跡であるとされている。妻木山・晩田山という標高１２０ｍ前後の２つの丘陵にかけて、東西２ｋｍ、南北１、７ｋｍに亘り、面積は約１７０ヘクタールとされる。遺跡の広大さのため、全体を洞ノ原、妻木山、妻木新山、仙谷、松尾頭及び松尾城の６つの地区（別紙１）に分けて調査・整備することとされている。

元来、人は生産活動を行うにあたり、職住近接が好ましいといつの時代にも考えるであろう。もともと孝霊山の麓の扇状台地に暮らしていたであろう人たちが、平地の暮らしを棄て、山の上の不自由な生活に耐えながら、３００年も住み続けた理由は何であったであろうか。確かなことはわからない。

しかし、想定される一つには、当時の列島における社会的緊張の存在が背景にあったのではないかと思われる。この頃、列島は国として統一されていく過程にあって、列島内の社会情勢は、激動と不安定な状況にあったことが想定される。

「考古学によって、弥生時代中期から後期にかけて、列島全域で騒乱があったことが明らかにされている。「魏志倭人伝」などの史書は、２世紀末に「倭国大乱」があったことを記している。この時期、列島は日本統一に至る動乱の時代といえた。」（武光　誠「魏志倭人伝と邪馬台国」）

ここ妻木晩田の丘の麓の村ムラにも、こうした列島内における社会情勢の不安定な状況は、当時情報として伝わっていたことであろう。弥生時代中期後葉から松尾頭地区に人が住み始め、後期に入ると松尾頭地区のほか、妻木新山、妻木山地区でも住居が確認され、集落の形成が始まっている。後期後葉には、更に集落規模は拡大し、ムラは最盛期を迎えることになるのである。

平成７年から行われた発掘調査の結果、９６８棟（竪穴住居４５６棟、掘立柱建物５１２棟）の建物跡が発見された。勿論これは、この丘に人々が暮らしていた約３００年の間における暮らしの痕跡の集積であるが、その外に、四隅突出型墳丘墓１３基を含む３６基の墳丘墓や貯蔵穴１０７、鉄製品４７７、その他多くの土器片が発掘されている。（平成２７年度現在）これまでに国内で発掘された弥生時代の遺跡としては有数の広さを有するものとされている。

２　高地性集落

弥生時代中期以降、列島各地に多くの環壕集落や高地性集落と呼ばれるムラが出現する。

環壕集落は、環壕を掘ることにより「外界と内なる世界を明確にすることにあった。環壕の内部には身内を認識し、結束力の高揚をはかり、異質なものを排除しようという共同の幻想があった。縄文人は原則としてムラの周りに壕を掘らない。だから、環壕集落も水田稲作とともに朝鮮半島南部から新しく伝来した弥生文化を特徴づける要素のひとつである。環壕集落は、敵の侵入や害獣の侵入を防ぐための防御機能を備えていたことも間違いない。」（寺澤　薫「王権誕生」）

妻木晩田遺跡にも環壕はあった。しかし、それは集落全体を囲むものではなく、洞ノ原西側丘陵の斜面に同丘陵をぐるりと囲む径約６５ｍの壕である。環壕が設けられていた当時、環壕の内側には居住施設はなかったとされている。「したがって、環壕に囲まれた環壕集落というよりも、集落の一角に環壕がある、という表現の方が正しい。」（高田健一「妻木晩田遺跡」）こうした環壕が妻木晩田ムラで何故、何のために掘られたのかということはよくわかっていないが、いずれにしても妻木晩田のムラは環壕集落とはいえない。

一方、高地性集落とは、「低地の水稲農耕集落にたいして、小高い山の頂上や丘陵上に立地する集落をいう。水田耕作が可能な平野を控えながら、日常の農作業に支障をきたす山頂や急峻な丘陵上につくられた特殊なムラをさす。」（寺澤　薫　前掲書）

標高１２０ｍ内外の２つの丘陵上に形成された妻木晩田ムラは、まさしくこの高地性集落に該当すると考えられる。列島の社会的緊張に反応して造られた典型的な高地性集落に当たるといえよう。

妻木晩田ムラに最も多くの人々が集住したのは、弥生時代後期後葉、２世紀後半の頃とされている。（鳥取県淀江町教育文化事業団「妻木晩田遺跡洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書」以下「調査報告書」という。）この頃、中国の史書「魏志倭人伝」によれば「倭国乱相攻伐暦年」と記されているが、具体的な時期については、何も触れてはいない。しかし、「後漢書倭伝」では「桓霊間倭国大乱更相攻伐暦年無主」と記載されており、この記述に従うならば、桓霊の間とは、西暦１４７年から１８８年とされているので、妻木晩田ムラの最盛の時期と重なり合うことになる。このことは多くの人々が妻木晩田の丘に移住したことが、列島の社会的緊張関係を背景とし、それとなんらかのかかわりがあったことをうかがわせる。

やがて、古墳時代前期初頭になると、山の上のムラから人々の姿は急速に失われていく。「その終焉にあたっては、地域全体で時期が一致することから、平野部に下りたと考えるのが自然とかんがえる。この時期から井出挟３号墳の墳丘下など、平野部でも住居跡が確認されるようになる。また、妻木晩田遺跡では、古墳時代前期前葉に畿内系の土器が入る現象が見られ、この後集落が平野に下りたと考えると、畿内との何らかの係わりにより、社会的緊張状態が解消したものと想定されるのである。」（前掲調査報告書）

このように、約３００年続いた妻木晩田のムラは一挙に衰退し消滅していったものと考えられる。

３　拠点集落

弥生時代中期後葉以降妻木晩田の丘に人々が住み始める頃、周辺には東に茶畑山道遺跡、日野川右岸には福岡遺跡,尾高浅山遺跡、日野川左岸には福市・青木遺跡、越敷山遺跡などを中心に、多くのムラが展開していたと思われる。（別紙２）妻木晩田遺跡は、こうした西伯耆における各集落の中で主要な拠点集落として存在していたのではないかと思われる。福市・青木遺跡や越敷山遺跡群は、この地域では大規模な集落跡として、住居数が１００基以上確認されている遺跡（前掲調査報告書）とされているが、妻木晩田遺跡で確認されている建物跡数には遠く及ばない。

妻木晩田遺跡がこのように地域における中心的な拠点集落としての機能を有することになったのは、一つには淀江潟の存在を抜きにしては考えられないように思える。当時、日本海沿岸には、海岸線に沿って多くの潟湖が形成され連なって存在していた。これら各潟湖を結んで、活発な交易や情報交流が行われていたことが多くの研究者から指摘されている。

縄文時代、現在の淀江平野には日本海が大きく入り込んでいて海であった。約６０００年前、所謂縄文海進と言われている海水面の上昇の後、その後の縄文・弥生の時代を通じて次第に海退が進み、妻木晩田の丘に人々が住み始める頃には、湾口砂洲の発達により、現在の淀江平野は一部潟湖の形で残り、それ以外の地はおそらく湿地帯の状態であったと想定される。（八尾正巳「古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察」）

淀江潟については、「潟湖として外洋とつながっていたのは、おもに縄文時代のことであり、弥生時代以降は潟そのものが港の機能を果たすことは難しかったと思われる。」（高田健一　前掲書）とする指摘がある。

また、「美保関とは淀江と古来深いつながりをもっている。（中略）弥生文化は単なる稲作だけの文化でなく交易に大きなウエイトを認めねばならない。地形・地理からみて今は水田化しているが、古代淀江港は美保関港よりはるかに港湾としてすぐれた港であらねばならない。」（佐々木　謙「鳥取県淀江町・宇田川地区土地改良に伴う調査概要」）とする見解もある。

いずれにしても、大山、孝霊山及び隠岐を結ぶ地図上の一直線上に妻木晩田遺跡が存在していることの地理的、地勢的条件や、環壕が掘られた洞ノ原西側丘陵の存在を考えると、妻木晩田ムラの交易的機能を支えた古代淀江港の存在は否定することはできないように思われる。

その古代淀江港を介して、古代出雲や北部九州、あるいは隠岐を通じて韓半島東海岸等との間で何らかの形の交易が行われていたと考えられる。このように妻木晩田ムラは、日本海沿岸の交易ルートに沿った拠点の一つとして、西伯耆における交易の中心的存在であったのではないか、と考えられるのである。

４　ムラの盛衰と終焉

妻木晩田遺跡には、妻木山地区に遺構展示館が設置されている。この遺構展示館には、弥生時代後期後葉から終末期の竪穴住居跡が３棟（妻木山第１１７号、第１１８号及び第１１９号）発掘されたままの状態で展示されている。これら３棟のうち、柱穴の状態から見て、第１１７号は１回、第１１８号は２回の建て直しをしていると見られる。つまり、遺構展示館の３棟は、建て直しを含めると延べ６棟の竪穴住居として供されていたことを示している。また、場合によっては、建て直しをしても、柱穴はそれまでのものをそのまま利用したケースもあったであろう。

このように考えると、４５６棟の竪穴住居跡は、３００年間に建て直しを含め、延べにして約２倍の竪穴住居が建てられ、供されていたと想定することが可能である。仮に、１棟の竪穴住居が２０年間使用に耐えるとすれば、極く単純な算術的平均として６０棟/年ということになる。つまり、多いときも少ないときもあるが、ならせば平均６０棟ということである。

一方、妻木晩田ムラは、弥生時代中期後葉頃から人が住み始め、約３００年存続したとされている。しかし、詳細に見ると、その初期の頃の住居数は極く限られたものであり、少なくとも集落と呼ぶにふさわしい規模になるのは、後期後葉頃からと想定される（別紙３）。このように、初期の頃の妻木晩田のムラは、周辺の拠点集落と考えられるムラと比較して、それほど突出した規模のものとはいえない。

やがて、２世紀後半、列島における社会的緊張関係の高まりに伴って、孝霊山麓の扇状台地に点在して暮らしていた人びとは、それぞれに血縁や地縁等、いろいろな形の小集団毎に危険を避けるため妻木晩田の丘に、移り住んだのではあるまいか。

この点に関して、次のような指摘がある。

「丘陵部にある集落すべてを、争いから身を守るために平野部から移動してきたものとは考えられない。平野部から丘陵部へこぞって人が移動したならば、平野部の遺跡数は激減するはずだが、遺跡数の増減を調べてみると、大山山麓では、弥生時代を通じて平野部の遺跡数に大きな変化が生じていない。

つまり平野部にあった集落が丸ごと丘陵部へ移動したのではなく、平野の集落に暮らしていた人びとの一部が丘陵部に移り住んだと考えるのが自然である。

想定されるのは、人口が飽和状態になった平野部の集落からの分村のような動きである。（中略）弥生時代中期後葉にあらわれた「妻木晩田」村は、丘陵部に新天地を求めた人びとが草分けとなって開いた小さな村だったと考えておきたい。」（濱田竜彦　「日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田」）

勿論、山の上に移住しないで、そのまま平野部で暮らし続けた人びともあったであろう。しかし、妻木晩田の丘に移り住んだ人びとも、山の上にあがった後においても、農業や漁業に携わるために、日々平野部に下りて田畑や海等での作業を、それまでと同様に続けたことと考えられる。こうした人びとは、おそらく倉庫や作業場などの生業拠点として、従来の住居をそのまま利用し続けたこともあったに違いない。

とりわけ、古墳時代前期前葉、山の上のムラが短期間のうちに一斉に消滅したことを考え合わせると、そうゆう平野部のムラの風景を想定する余地もあるように思われる。

いづれにしても、妻木晩田ムラが最盛期を迎えるのは、おそらくは弥生時代後期後葉から終末期までと想定され、それはせいぜい６０年前後の間のことかと思われる。

仮に、前述したような算術的平均の数値を踏まえると、最盛期とされる時期には、ムラには１００棟程度の竪穴住居と５００人前後の人たちが暮らしていたと想定してもよいように思われる。

当時、列島全体の人口はどの位であったであろうか。それについては、「弥生時代後期後葉頃（１８００Ｂ・Ｐ・）列島全体の人口は、５９万４４百人であり、このうち山陰（丹後、但馬、因幡、伯耆、隠岐，出雲、石見）は１万７７百人」とする研究がある。（鬼頭　宏「人口から読む日本の歴史」）いずれも推定の域を出ないが、その頃の状況を知る目安にはなるであろう。

発掘調査が始められた早い時期、遺跡全体の評価にあたって、松尾頭等の各地区ごとに機能分化した山上の弥生都市ではないか、とする指摘がなされた時期がある。しかし、山上における遺構の居住単位の形態及び構成や、移住の要因などから考えると、そのような計画性があったとは考えにくい。

やがて、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけて、ムラは一斉に衰退し消滅したものとされる。このことに関して前掲調査報告書は、人々は平野部に下りていったのではないかと推定している。かくして、山上の集落は終焉し消滅した。

ムラは何故終焉したのか。その基本的な要因は何だったのか。

一つには、畿内に列島の部族連合政権が樹立されるとともに、列島における社会的緊張状態が緩和し解消したことが考えられる。今一つには、おそらく縄文時代以来から続けられてきた日本海沿岸を通じた交易ルートの衰退が挙げられるのではなかろうか。

そもそも、畿内ヤマトを中心とした部族連合政権の樹立の目的は、安定した瀬戸内海

の交易ルートの確保・確立にあったのではないかと思われる。

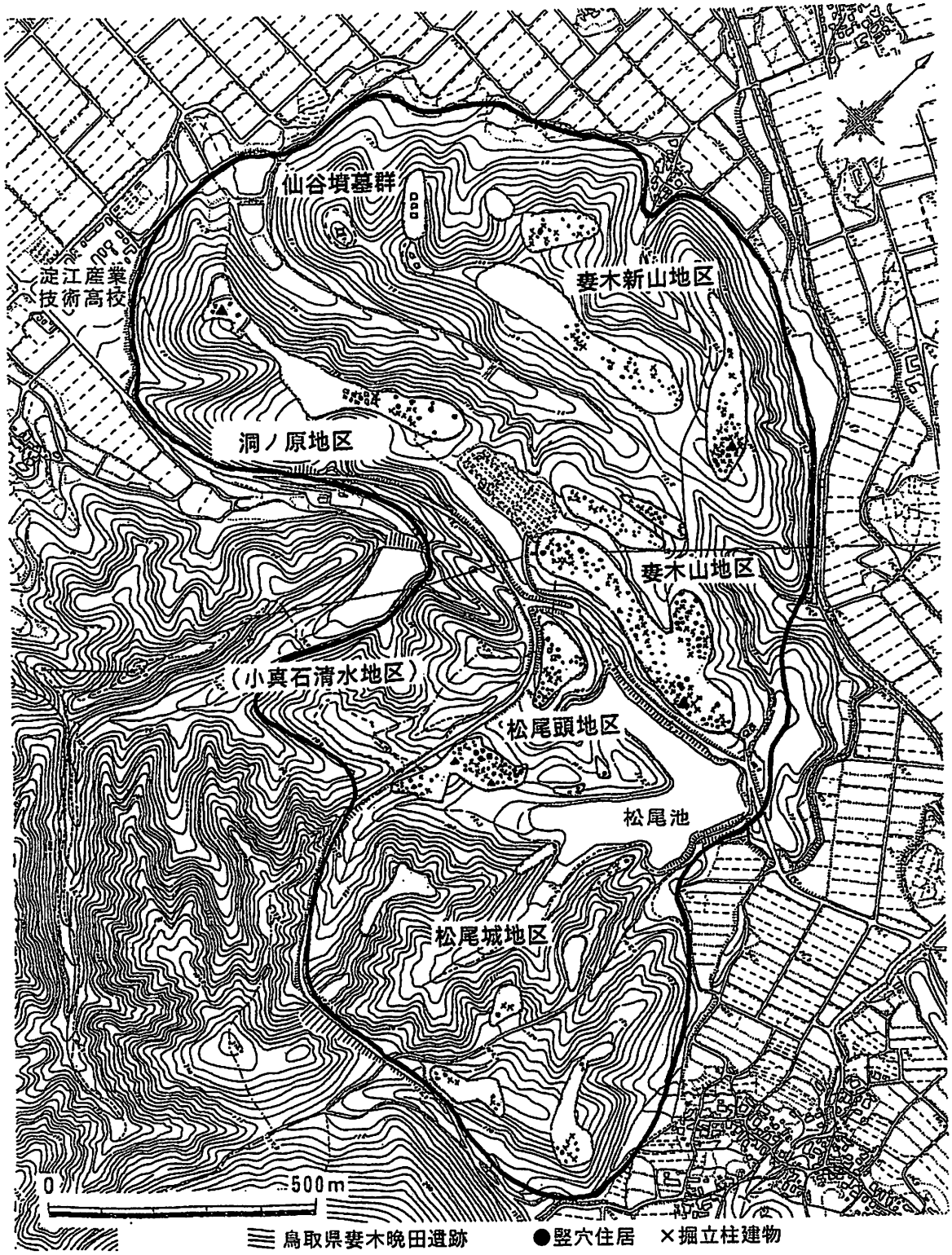
更に、従来それぞれの地方において自立していた各地の豪族達を、部族連合政権として畿内ヤマトの下に一本化し、対外的にもこの連合政権ヤマトが列島を代表するという、極めて強い政治的意図をもって進められたものと考えられる。従って、従来の日本海沿岸における交易ルートの存在は否定され、容認されないこととなる。これに伴い、それまで日本海交易圏において活動し栄えてきた古代出雲は一気に衰退し、これとともに妻木晩田、青谷上寺地等、日本海沿岸の潟湖を介して行われた交易によって栄えていた各地域も、あわせて次第に衰退していくことになるのである。それは、ある意味、列島における歴史の必然ともいえるかもしれない。これ以降日本海沿岸は裏日本と位置づけられ、列島における歴史の表舞台にたつことはなくなっていくのである。

5　おわりに

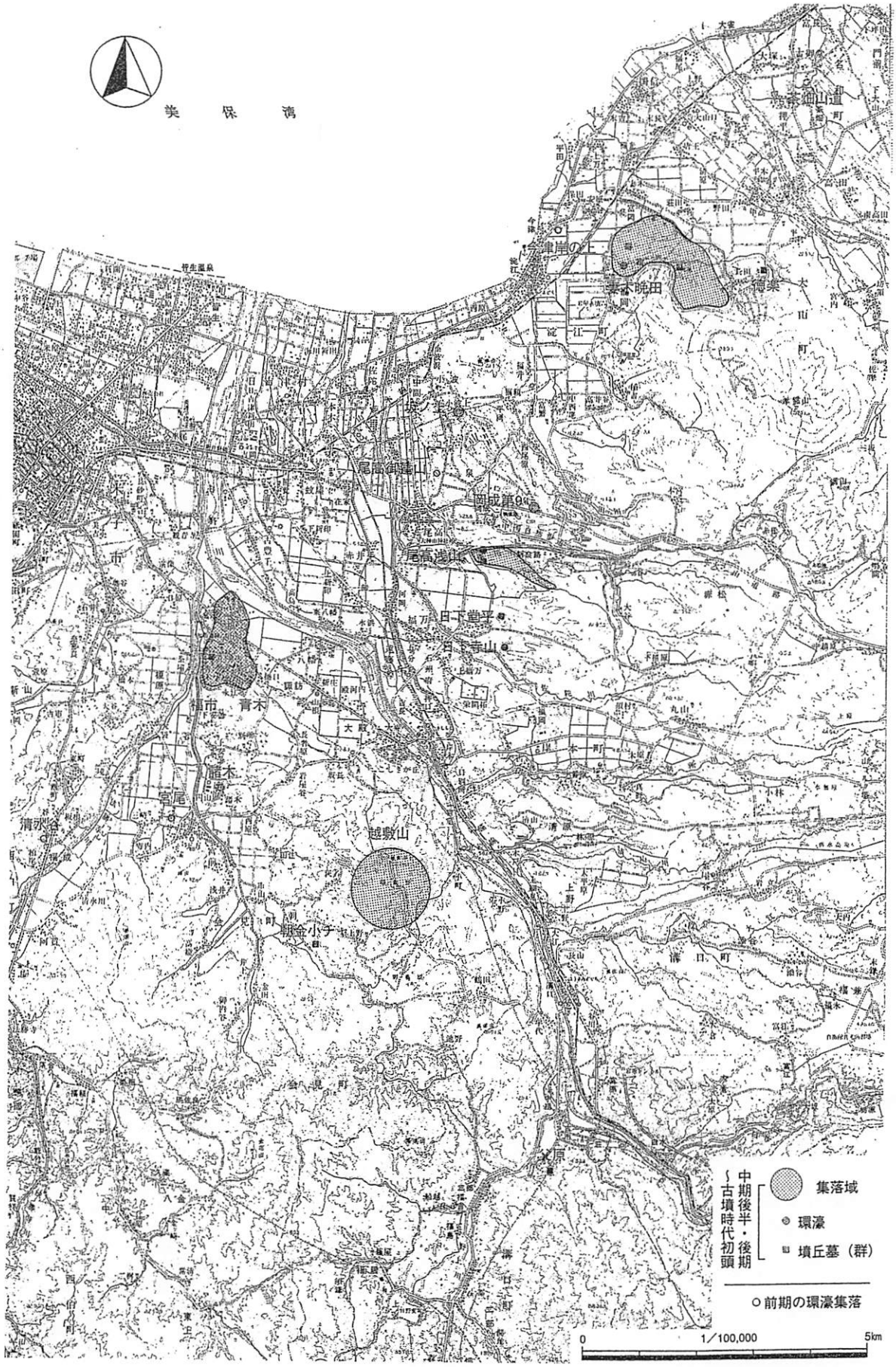
「妻木晩田遺跡周辺は、鳥取県内でも最も早くから人類が定着的な生活基盤を置いたことが判明している地域の一つである。」（高田　健一　前掲書）という。妻木晩田ムラの消滅した後、妻木晩田山の西麓にあたる福岡地区には、この地域最大といわれる向山古墳群が集中して築造されている。それらは５、６世紀にかけてのことであり、やがて７世紀には上淀廃寺が創建されている。これらのことから、この頃までは、この地方をとりまとめた有力な首長（勢力）が、この地にあったことを想定させる。このように、弥生時代中期以降、妻木晩田ムラ・向山古墳群・上淀廃寺と一連して続いた時代、この辺りは所謂「汗入」と称される地域の中心的な地であったことは、想像に難くない。

しかし、上淀廃寺廃絶後、この地は次第にその存在感を失う。その理由は明らかではないが、ただ、将来考古学的な調査が進められ、未だその存在が明らかでない汗入郡の郡衙の跡が判明すれば、この地方の、その後の盛衰も自ずと辿ることができるであろう。

約12,000分の1



≡ 鳥取県妻木晩田遺跡（中期末～後期末）　●竪穴住居　×掘立柱建物　▲大型建物　□墳丘墓（四隅突出墓を含む）



西伯耆弥生時代主要遺跡の動態

段階	時代区分	時期	松尾頭・小真石清水 居住域	松尾頭・小真石清水 墳墓	妻木山・洞ノ原 居住域	妻木山・洞ノ原 環壕	妻木山・洞ノ原 墳墓	妻木新山・仙谷 居住域	妻木新山・仙谷 墳墓	松尾城 居住域	時期合計
I	中期後葉	1	貯蔵穴出現		貯蔵穴出現	形成					0
II	弥生時代 中期末	2	住居跡初源、円形 1		貯蔵穴減少		墳丘墓築造				1
		3	円形 1 貯蔵穴激増		貯蔵穴減少						1
III	後期前葉	4	円形 2					住居出現 3 不整円形、隅丸方形			5
		5	円形 4		住居出現、円形 4			住居増 16 円形、楕円形主			24
IV	後期中葉	6	円形 5		円形→隅丸方形 5		周溝内埋葬	住居減少 円形、不整円形主 9	墳丘墓出現		19
		7	住居増 10 円形主体、隅丸方形出現		住居形態多様化 3			円形、楕円形主 11 大型住居（35.36m²）			24
V	後期後葉	8	住居増 17 大型住居、大型建物 （両庇付大型掘立柱建物） 住居形態多様化 SI45で後漢破鏡 遺構密度最大		住居増、形態多様化 17	埋没		円形、隅丸方形 9		住居出現 1	44
		9	住居数最大 22 大型住居（41.76m²他） 住居形態多様化		住居数最大 56 大型住居（44.96m²他） 隅丸方形過半数 SI119で銅鏡出土			住居増 14 住居形態多様化 大型住居（34.56m²）		住居増 5 隅丸方形主 SI11から銅鏡紐 大型住居（33.12m²）	97
VI	終末期	10	住居減少 7 隅丸方形 大型住居（31.00m²他）		住居減少 16 隅丸方形 大型住居（33.92m²他）			住居減少 5 隅丸方形主			28
		11	住居小型化 7	墳丘墓	住居数やや増 24 住居形態多様化（隅丸方形、多角形、隅丸三角形） 大型住居（38.56m²）			住居減少 3 大型住居（38.48m²）		隅丸方形 3	37
VII	古墳時代 前期前葉	12	住居減少 5 住居小型化 玉造工房（SI31）		住居減少 9 隅丸方形主 大型住居（34.88m²）			隅丸方形 5 大型住居（34.24m²）		隅丸方形 3	22
		13	住居減少 4 方形		住居減少 3 方形、小型化			方形主、小型化 3 土器焼成土坑（SK156）		方形 1	11
		計	85		137			78		13	313

〔注〕アラビア数字は土器編年
ローマ数字は集落の推移段階を示す。

妻木晩田遺跡の推移（松井潔作図を一部改変）